エッセー

異世代共学の実践—立教セカンドステージ大学と全カリ

庄司　洋子

私が立教大学社会学部に着任したのは、1990年の春である。社会学部の教員として17年間、その後さらに5年間を大学院の特任教員として過ごさせていただき、この春、その任期を終えようとしている。私の人生にとっては思いがけない職業生活の展開という側面もあり、今、さまざまな想いをもってこの20年余を振り返っている。

着任早々に経験した総長選挙の光景は、私にとっては鮮烈なものであった。前任校でこうした体験がなかったというだけでなく、何よりも非常に素朴でのどかな民主主義を体感したからである。そして、その印象は、その後大きく覆されることなく、むしろ補強されていったと思う。特に、現在の全学共通カリキュラム（通称：全カリ）を立ち上げる準備作業の委員会活動では、いつ果てるとも知れない議論に熱中する諸先生方の姿にまた驚き、大変な大学に来てしまったらしいという思いを新たにしたのである。たまたま私は学部から委員会に送り出されたのであるが、頻回かつ長時間の会議に対して辛さと同時に何か可能性を感じるようになり、それまで真面目に教養教育のことを考えてきたわけでもない自分が、次第にはまっていくのがわかって、我ながらおかしかった。

その後、私はまったく思いがけないことに、全カリ部長という役職をお引き受けすることになった。初代の寺崎昌男先生、2代目の所一彦先生に比べて、3代目の私はあまりに経験も識見も乏しすぎたが、その私がうろたえないようにと必死で支えてくれていたのは事務室の職員の方々である。もちろん会議では各学部の運営委員の先生方の良識にも助けられてきた。今考えても赤面するほどのお粗末な力量の私を陰で支えてくださった事務室の皆さんには、どんなにお礼を申し上げても足りないと思う。そして、全カリの立ち上げと運営にかかわってきた職員の働きは、立教民主主義（という言葉があるかどうかは知らないが）を象徴するものだと思ったし、今もなおそう思っている。おかしな大学だと冷淡に見ようとしても、しかしやはり好きだ、と思ってしまうのは、この全カリでの経験によるところが大きい。

さて、私は、5年前に特任教員として大学院生の教育にあたると同時に、当時の総長室で構想されていた生涯学習プログラム「立教セカンドステージ大学」（略称：RSSC）にかかわることになった。1年間の準備期間を経て2008年度に予定どおり創設の運びとなり、「学びなおし」と「再チャレンジ」を掲げるこの特別な「大学」の運営に関わってすでに4年を経ている。実はここで、私は思いがけずもう一度、全カリと出会い直すことになったのである。私にとって「もうひとつの全カリ」ということになる。

RSSCは、50歳以上の男女を対象とする1年制の生涯学習プログラム（定員70名）であるこの「大学」は、いくつもの特色をもっている。まず、カリキュラムの構成として、「エイジング社会の教養」「コミュニティデザインとビジネス」「セカンドステージ設計」の3つの科目群からなるシニア層向けの独

自の講義科目が展開され、同時に、修了報告書を執筆するためのゼミ参加が必修化されている。加えて、一定の範囲で学部学生と共に全カリ科目を履修することが認められていることは、私のようにかつて全カリ運営にかかわり、今RSSC運営に携わる者にとっては、喜びとか誇りとかの一言では言い尽くせないほどのものがあり、これこそはRSSCの最大の特色だ、と一人で思わず胸を張ってしまうのである。

著名なジャーナリストの立花隆先生が、2008年度から独立研究科の特任教授として着任され、同時にRSSCの準備・運営および科目担当を引き受けてくださった。その立花先生が、常々、この全カリを立教大学の建学の精神の結実として極めて高く評価してくださり、講演会や講義でそれを熱く語ってくださっているので、その勢いを得て、私も、受講生へのガイダンス等では、ついつい立教大学の自慢話として全カリの特徴を熱っぽく語ってしまい、少々やりすぎかなと内心苦笑することもある。

当初は既存学部・大学院の学生のための池袋キャンパス内に、どこの大学にもないやや異色の試みとして遠慮がちに開設されたRSSCであるが、いまでは、私と同年代のおじさんおばさん達が鈴懸の小径を談笑しながら闊歩したり、図書館やメディアセンターに陣取ったりする姿が、少しずつ違和感なく溶け込んできたように思う。そして何よりも、RSSCが、単に学内空間を利用させてもらっているのではなく、学部生と共に全カリで学ぶ機会を与えられていることが、受講生にはかけがえのない魅力になっていることを、確信している。

RSSCは、団塊世代の特徴である性別役割分担を超える男女共学制度であると同時に、私の言葉でいえば全カリを学部学生とともに学ぶことのできる優れた「異世代」共学制度でもあるのだ。同じ教室でこうした異世代は互いに何を感じあっているのか、実に興味深いところである。受講生にとって、いまどきの大学生の教室風景を見るだけでなく、自分もその中の1人になるという感覚は、さぞかし新鮮なものだろう。かつて大学を卒業した受講生は昔の自分をそこに重ねるだろうし、大学に行かなかった受講生にとっては、さらにいろいろな想いが湧くことだろう。RSSCの設計にあたって、立教大学にこの異世代共学を実現するために、二重の共学制度の一つである全カリ履修を受講生に認めてくださった学内関係者の見識には敬意と感謝をあらわす言葉も見つからない。

開設当初は、総合A科目の中の立教科目（61科目）について各科目5名までが認められ、RSSCとしては履修上限を前後期各1科目、うち1科目のみを修了要件単位に振替可能とした。開設3年目の2010年度には、立教科目に加えて総合A科目群全体（ただし1・4・5時限のみ、151科目）の中からの履修が可能となり、RSSCの履修上限も前後期各2科目に拡大した。さらに、全カリが新カリキュラムで展開される2012年度には、主題別科目群・立教科目群（A）の約300コマが受講生にとっての履修対象科目となり、各科目3名までとなるものの、受講生にとって悩みの時限制限（1・4・5時限のみ）も撤廃されることになった。受講生の全カリに対する熱い要望に何とか応えたいとその可能性を探る中で、こうした前進が引き出されたことは喜ばしい限りであり、RSSCにとっても全カリ新段階である。

そもそも全カリ科目に限らず、RSSC受講生の受講態度には特徴的なものがある。RSSCの受講生は学部生とちがって最前列から席を埋めていくし、その上、授業開始時刻までにはほぼ全員がしっかりと着席して講師を待っているのだ。これには私自身も最初はたじろいだのだか

ら、全カリ担当の先生方には、こうした受講生の存在が何がしかの緊張をもたらしているのではないかと想像しているし、学部生にとっても何がしかの刺激になると期待したい。

自分たちがかつて大学で受けてきた教養教育との違いに驚きの声をあげる受講生が少なからずいて、これこそは全カリの成果だと実感する。また、授業の水準が高くて非常に満足だと語る受講生の話を聞いて、かつて私が全カリ部長だった当時に強調した科目担当教員の厳選という努力が、一定の成果を挙げているようで嬉しく思う。その勉強振りを担当の先生から絶賛された受講生、S 評価をもらってその意味を尋ねに事務室へ走ってから狂喜した受講生など、実にさまざまなことがあって楽しい限りである。

こうした気持ちから、私たちが掲げてきた標語でもある「進化する全カリ」の姿を、RSSC の今後の発展と重ね合わせながら見守り続けたいと思っている。

しょうじ　ようこ
(本学 21 世紀社会デザイン研究科特任教授／
元全学共通カリキュラム運営センター部長)